

## 宇宙礼拝の集い

鈴木 康志

地の誇り高ぶる者はみな主を拝み、ちりに下る者も、おのれを生きながらえさせえない者も、みなそのみ前にひざまずくでしょう。(詩篇 22:29)

22篇は、十字架のキリストを啓示していると言われているメシア詩篇のひとつです。その最後は圧巻の締めくくりです。上のみことばは、その箇所の一部です。あらためて、なんとという贖いが宣言されていることかと感動します。

ちりに下る者も、おのれを生きながらえさせえない者も、みなそのみ前にひざまずくでしょう。(詩篇 22:29)

この宣言に心震えませんか。「ちりに下る者」というのは、キリスト教会の伝統的な思考においては、大罪を犯し、天に上ることができず、地下の深いところに閉じ込められた存在であり、また、「おのれを生きながらえさせえない者」とは、母の胎の中で陽の光を見ることなく命絶えた存在であり、自ら命を絶った存在たちもそこに含まれていると思います。

いずれも多くのキリスト教会においては、これらの存在の救いはタブーであり、いや、神の救いから漏れてしまった存在として考えられています。そして、その真逆のところにあるものとして神の恵みが語られ、その恵み、その救いから漏れることの恐ろしさゆえ、そこから漏れないよう正しく生きること、すなわち律法が強調されます。

救いから遠ざけられたと思われている者たちの象徴である「ちりに下る者」、「おのれを生きながらえさせえない者たち」の贖いに触れようものなら、すかさず「異端」という物差しが振りかざされる。

しかしです。メシア詩篇である22篇は、「ちりに下る者も、おのれを生きながらえさせえない者も、みなそのみ前にひざまずくでしょう」と宣言しているのではないですか。十字架の贖いの深さ、広さ、高さは人知をはるかに超えるのです。

これは彼らも、キリストの十字架の贖いの光の中で、永遠の恵み(いやしとゆるし)の中に招かれ、主を共に礼拝し、さんびし、よろこぶ者とされる世界があるからです。神の救いは彼らにも届けられることのであかしなのです。

この詩篇22篇の根源とは、まさに宇宙礼拝です。天と地、地の下の者も、すべて

の口が主の御名をほめたたえる。この宇宙礼拝の中、すべての存在はさんびの中に  
住まわれる主にまみえるのです。

25節のことばです。

大いなる会衆の中で、わたしのさんびはあなたから出るので。わたしは主  
を恐れる者の前で、わたしの誓いを果します。 (詩篇 22:25)

この「大いなる会衆」とは、宇宙礼拝の assembly(集い)です。天と地、地の下の  
すべての者が共に主をさんびする会衆の集い。その中のさんびは主から出る。さん  
びは十字架の贖いそのもの。このさんびが届かないところなどないのです。

さんびは、天上にも、地下にも、暗闇にも、そして高ぶる者の心にも届く。さあ、宇  
宙礼拝の中で共に詩篇を歌おうではないか。 (2023/8/24 本部スタッフ)